

# 2004-2005 東京漢方入門講座

第1回

(通算21回)

## 『狂ったシナリオ』

2004.9.16

すでにお送りいたしました東京漢方入門講座2001-2002・2002-2003の全20回、そこでは東洋医学の考え方をもとに漢方処方についてのお話しをしてまいりました。そしてその続編である今シリーズに用意されたタイトル、そこにはいったいどのような意味が含まれているのでしょうか。

どのような場合でも、「こうだからこう」と薬剤を選ぶ側にはそれなりのシナリオというものがあるはずです。そのシナリオを描くには根拠（機序と言っても良いかも知れません）が必要です。

漢方薬を用いる際にも当然のことながら根拠が必要です。「なぜ」と「だから」です。『漢方薬を選ぶには東洋医学の根拠が必要』、ずっとそのようにお話しをしてまいりました。もしその根拠を持たなければ、当然の結果として「シナリオは狂う」はずです。

今回も変わらず主人公はDr.K、彼が繰り広げる漢方診療を中心にお届けして参ります。ただ前回までとは異なる点があります。それは「修行を終えたDr.K」は診察するといきなり処方を決定してしまうのです(修行の成果)。「どうしてその処方になるのか」「なぜ、他の処方ではないのか」「別の処方にチャンスはないのか」、これは先生方ご自身にお考えいただくこととなります。そしてシナリオが狂う理由についても。

今回のシリーズ、それは「漢方薬・生薬を題材とした知的ゲーム」。  
そんなお気持ちでご参加いただきたいのです。

「知識」を超えて「思考」の世界へ、どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。

### 【本日のkeyとなる生薬】

麻黄 桂枝 柴胡 石膏

会が始まる前、それぞれの生薬から『思いつく処方』をあらかじめご想像ください。はたして先生の思われた処方は登場するのでしょうか。登場したとしたら、その処方の目的はどこにあり、そしてシナリオとして何が必要であるのでしょうか。

さあ、今年も漢方診療のはじまり、はじまり。

## 【本日の内容について、ご確認ください】

### 【麻黄】

麻黄湯：麻黄、桂枝、杏仁、甘草

葛根湯：麻黄、桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草、葛根

麻黄附子細辛湯：麻黄、附子、細辛

### 【桂枝】

桂枝湯：桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草

五苓散：桂枝、茯苓、蒼朮、沢瀉、猪苓

### 【柴胡】

小柴胡湯：柴胡、黄芩、半夏、人参、生姜、大棗、甘草

柴胡桂枝湯：柴胡、黄芩、半夏、人参、  
小柴胡湯

生姜、大棗、甘草、桂枝、芍薬

桂枝湯

### 【石膏】

麻杏甘石湯：麻黄、杏仁、石膏、甘草

白虎加人参湯：石膏、知母、硬米、甘草、人参

\* 猪苓湯：猪苓、茯苓、沢瀉、阿膠、滑石

### ポイント

- 「燥湿」
- 「水」と「寒熱」
- 「清熱」の種類と方法

浅岡俊之

[www.asaoka.org](http://www.asaoka.org)

## 今回からご参加の先生方へ

漢方薬には以下のような特徴があります。

- 生薬から成っている
- 生薬の複合剤である

したがって漢方処方はそのに配合される生薬一つ一つの性質の合算としての特徴が反映されることとなります。

その「生薬の性質」から導き出される「適応」は東洋医学のルールで明確に規定されており、よってその集合体である漢方処方の適応も東洋医学の目線で捉えれば明らかなものとなります。

医学はどれも同じですが、どのようなかたちであれ診断を無しに治療を選択することはできません。東洋医学の場合も当然同じことです。ただ、東洋医学の診断は西洋医学の診断とは異なります。異なる医学ですので当たり前のことですが念のためお断りしておきます。

本日登場する患者さんは「カゼ」の方です。葛根湯をはじめとしてカゼに用いられる漢方薬は沢山ありますが、なぜあれほど沢山あるのだとお感じになられますか？

東洋医学では「病名を診断する」という方法論はとりません。疾患にかかわらず、当該の患者が「どのような状態にあるか」を診断するという方法をとります。ですので上述の「なぜカゼの漢方薬は沢山あるのか」の答は「カゼという疾患にはそれだけ沢山の状態があるから」となります。

本日の題名は「狂ったシナリオ」ですが、漢方薬を用いるには『東洋医学のシナリオ』を用意する必要があります。何故かといえば漢方薬が東洋医学のお薬だからです。そして、そのシナリオが西洋医学のそれとは異なる、本日はその点をご理解いただきたいと存じます。